

【日本語の歌詞の通釈】

注釈にある聖書への参照箇所を踏まえ、キリスト教主義に基づく立教英国学院建学の精神がよく表れていると考えられる部分は、() で意味が伝わるように言葉を補いながら、校歌を口語訳した。

- ① 曙が眠りから醒める(立教英国学院の) この丘の上に、春の光が満ちるとき、信仰を心に抱いて集まった若者たち(生徒たち)が、(キリストが教えた)希望と愛の、(その)うたを響かせるのだなあ。
- ② (学院の)マロニエ並木が葉を落とすと、その梢の高い(ところで)北斗星は、「(叩けば神によって開かれるという)真理の門を叩きなさいよ」とまるで囁くかのように瞬いていたのだった。
- ③ ここ南英の学び舎で、(キリストの)愛の訓えを身に着けて、様々な国の人々をも友として、当然行くのがよい道をきつと追究しよう。

④ (神の御心に適う人に)世界の平和が実現されるようなとき、「栄光は世々に限りなくあれよ」と(いう神への讚美と)ともに讃えよう、我が母校、立教英国学院を。

まず①においては、春、すなわち入学の時期に、立教英国学院へ生徒たちが集まってくる事が描かれており、さらに、その生徒たちが聖書にある通り、信仰と愛と希望を持ち合わせているのだということを歌っている。この歌詞は「若人」が集まってくるのを見る視点で書かれており、生徒たちを見守る先生方の感情が込められているようだ。

一方、続く②の歌詞では、歌い手の視点、設定、立場が明確でない。『立教英国学院特禱』(以下、『特禱』)に、「教える者と学ぶ者とを祝福し、共に知識を深め、主の真理と愛とを悟らせ……」とあることから、「真理の門を叩けや」と促されているのは教職員と生徒の双方ではないかと考えられる。①と打って変わって場面は秋に設定されていて、葉の落ちたマロニエ並木の向こうに見える「北斗星」の擬人化が印象的である。『特禱』では、「どうか、み名によって建てられた立教英国学院を見守り、その全ての行いを祝福し、導きのみ手を差しのべ……」という箇所があるが、古来より人々に方角を指し示してきた北斗星は、学院とその生徒、教職員を真理へと導く神や聖書の訓えのメタファーとなっているのではないだろうか。

さらに③は、「国際人を目ざすために」という注釈がつけられていることや、文末に「究めなむ」という強い意志が表れていることから分かるように、生徒側、すなわち「若人」の視点に立つて詠まれた歌詞である。学院自体は「南英」という特定の場所にあるが、聖書にある愛の訓えに従って、「もろ国人」を愛するのだという、学院で学ぶ者の決意を感じさせる節だ。『特禱』は、「真理と愛の源であり、すべての人の造り主、万民の父である全能の神よ」という神への呼びかけで始まるが、その冒頭の「真理」と「愛」は、この校歌では②と③でそれぞれ言及されている。

最後に、④は世界平和の実現と学院の末永い繁栄を祈る、神への讚美となっている。ここで、歌詞に現れる「ともにたたえん」の「ともに」という言葉の意味は、神を讃えるときにも学院を讃えよう、というようにも、また、生徒と教職員とが一緒になって学院を讃えよう、という風にも読めるが、「ますます学院の徳を確かなものとし、常に変わることはない主の栄光を輝かすことが出来ますように。」という『特禱』の箇所と照らし合わせてみれば、前者が解釈としてより相応しいと考えるのが妥当だろう。

日本語の歌詞と、英語に訳された歌詞とを比較し、日本語と英語とで大きく異なっている表現などを列挙する。

①

- a) All the world now seems bathed in
The fresh Light of Spring.
- b) Ever seeking faith and hope,
And love, above all.

まず、aであるが、原文では「丘の上 春の光のみつるとき」となっており、「All the world」に相当する言葉は登場していない。「春の光」を「The fresh Light of Spring」としているのも興味深い。蛇足であるが、これを読んで「The Rite of Spring」というストラヴィンスキーのバレエを連想してしまった。(例えばどれだけ美しく演奏したとしても、あの音楽が「希望と愛のうた」になるはずはない。)

本題に戻ろう。日本語版では「信もて集う若人が 呼ぶや希望と愛のうた」というように、『コリントの信徒への手紙一』十三章十三節にある「信仰と、希望と、愛」という三つの言葉の繋がりがやや見えにくいのが、英語版ではbにある通り、「Faith and hope, and love」と聖書と同じく三語を続けている。さらに、「さらにその中で最も大いなる、ものは、愛である。」という記述を受けて、「love」の後に「above all」という言葉がしっかり記されているため、原文よりも英訳の方がより聖書への参照、引用が分かりやすい形で行われているのだといえる。

②

- c) Is it whisp'ring to us now,
Twinkling all the while?
- d) “Knock ye at the Gate of Truth:
Opened it shall be!”

次の第二節は、内容に原文と英訳とで大きな差は見られない。ただ、強いて言えばcは原文と違って疑問の形になっている。

また、dはほとんど聖書箇所をそのまま引用した歌詞になっていて、①でも述べたように、英訳版は原文と比較してあまり注釈を必要としないものとなっている。

③

- e) Day by day 'tis girding us
With precepts of love;
- f) And binding us in friendship
With men of all lands

原文の「愛の訓えの帯をしめ もろ国人を友として」という箇所にあたるのが上のeとfであるが、ここでは英語らしい、非常にもしろい表現がなされている。

この英訳版では「girding us with precepts of love」(「愛の訓えを締める」)と「binding us in friendship with men of all lands」(「もろ国人と絆を結ぶ」)というのと同じ文型の、ある種の対句になって表れており、原文の「帯」にそのまま該当する単語は見受けられないものの、「gird」(締める・巻きつける)と「bind」(縛る・巻く・結ぶ)という二つの単語を使うことで、背後にある比喩的な帯やあるいは紐といった言葉の気配を醸し出し、そのような言葉の存在を暗示するような役割を果たしている。私の極めて個人的な所見を述べるならば、英語版のこれらの表現は、安易で詩的な味わいに乏しい日本語版の「愛の訓えの帯をしめ」などという言い回しを凌駕しているように感ずる。

- g) Glory to the highest
To god forever!
- h) Then too we'll sing praises to
Our Alma Mater.

最後に、第四節に軽く触れておこう。先程、「日本語の歌詞の通釈」において、④の歌詞の二種類の解釈について述べたが、ここでその議論のある種の正解を確かめることが出来る。英訳版ではgの箇所ですまず神への讚美が歌われ、「Then too」と続けてhで立教英国学院への讚美が歌われることから、原文の「ともに」という言葉は、神と立教英国学院とをともに讃えよう、という文脈で使われているとみてほぼ間違いないだろう。

「Our Alma Mater」という言葉はよく英語の校歌で使われるのか、私の母校である同志社中学校の「Doshisha College Song」でも登場していたことを覚えている。立教英国学院の校歌の研究を通して、他の校歌との比較研究を試みるのも、興味深い今後の研究課題になりそうである。

【結論】

立教英国学院の校歌から、そこに込められた建学の精神とは何か考えてきた。聖書に書かれたキリストの教えに従って生活し、信仰と愛と希望を大切にしながら、世界の平和のために活躍する国際人となるのが、立教英国学院の校歌に込められた、生徒たちへの願いである。他者を思いやる、広く世界のために尽くす、そういうことの出来る人間になっていけるよう、あと一年もない学院での生活を大切にして、貪欲に学んでいきたい。

立教英国学院高等部

二〇二〇年四月二十四日